

きたかる新発見

浅間牧場が すばらしい。

この広い草原は、きっとみんなを感動させる。

そこには今まで見たことのない大きな山があった。



標高 1300m にある浅間牧場。
夏場、30℃になることは稀で、冬場は日中でも 0℃に満たない日がほとんど。
6 ～ 9 月にはよく霧が出ます。



素晴らしい緑の海原。えっ、ここってどこ？





「牛たちは、人なつこくて好奇心旺盛。
なかにはいたずらっ子もいて手を焼きます！」

浅間牧場には、一年の合計で600頭近い牛が暮らしています。牛たちは、みんな女の子。どうしてかって？ここにやって来るのは、群馬県内あちこちの酪農家で飼われているホルスタインなどの乳用牛。夏涼しく、広々とした高原で、ゆったり、のびのび、元気に過ごして、立派な母牛になる準備をするために預けられているのです。女の子だからかどうかはわかりませんが、みんな揃って好奇心旺盛。写真を撮っていると、さっそく「わたしが主役よ！」と割り込んできました。獣医師でもある職員さんによると、牛にも臆病な子から目立ちたがり、いたずらっ子まで、色々いるそうです。人間とおんなじですね。

牧場の敷地内にある、お椀を伏せたような形の「天丸山」。
山頂は、浅間山から浅間隠山、草津白根の山並みまで
一望できる絶景スポット！

遠くを見る、近くを見る。うわー、みんな自然だ。





「ホーレイ、ホーレイ」「オイッ、オーイ」
牛飼いの声が、広い草原に響きます。

今日は、年に数回ある牛たちのお引越しの日。数十頭ずつグループに分かれて放牧されている牛は、"新入生"が入ってきたり、成長の早さに合わせて、ときどき"クラス替え"をします。放牧地から放牧地へ移動するときも、牛たちはやっぱりマイペース。道草を食べてばかりいます。そんな牛たちのスピードにあわせて、職員さんもゆっくり歩きます。独特のかけ声は、大きな声を出し続けても喉が枯れないように工夫しているのですって。

鹿やイノシシ、クマなどの野生動物も多く生息する牧場内。
数キロにわたって、
職員手づくりの鹿よけの柵が設置されています。

大きな山と草原は、鹿よけの柵さえアートにしてしまう。



昭和の名曲「丘を越えて」の歌詞は、
作詞家・島田芳文氏が浅間牧場を舞台に創作したもの。
解放区内には記念碑があります。



草原をずっとずっと歩いて行くと、



夏から秋にかけては、
コオニユリ、マツムシソウ、ワレモコウ、オミナエシなど、
自生の高山植物が咲き揃います。



よく来たね、と太陽と雲があいさつしてくれた。





浅間牧場は、野生の高山植物のお花畑でもあるんです。

広大な浅間牧場の敷地のなかには、牛たちが過ごす放牧地のほか、牛の餌になる干し草（サイレージ）づくりのための採草地や、ここで働く人たちが暮らす宿舎などもあります。牛の世話以外に、この広い敷地を維持・管理していくことも、牧場で働く人たちの大切な仕事。散策路の脇の草刈りをしていたのは、牧場勤務歴 50 年というベテラン職員さん。「一般の人も楽しむ散策路は、いつもきれいにしておきたいからね！」草刈り機が通ったあとをよーく見てみると……。マツムシソウやワレモコウなど、浅間牧場に残る希少な高山植物だけが丁寧によけられて、のびのびと可憐な花を咲かせていました。



気分はいかが？

牛たちは案外、夜行性。
夏は、夜から早朝にかけて放牧地に出て、
昼間は牛舎や涼しい木陰で休んでいることが多いそうです。





「モー、サイコー」

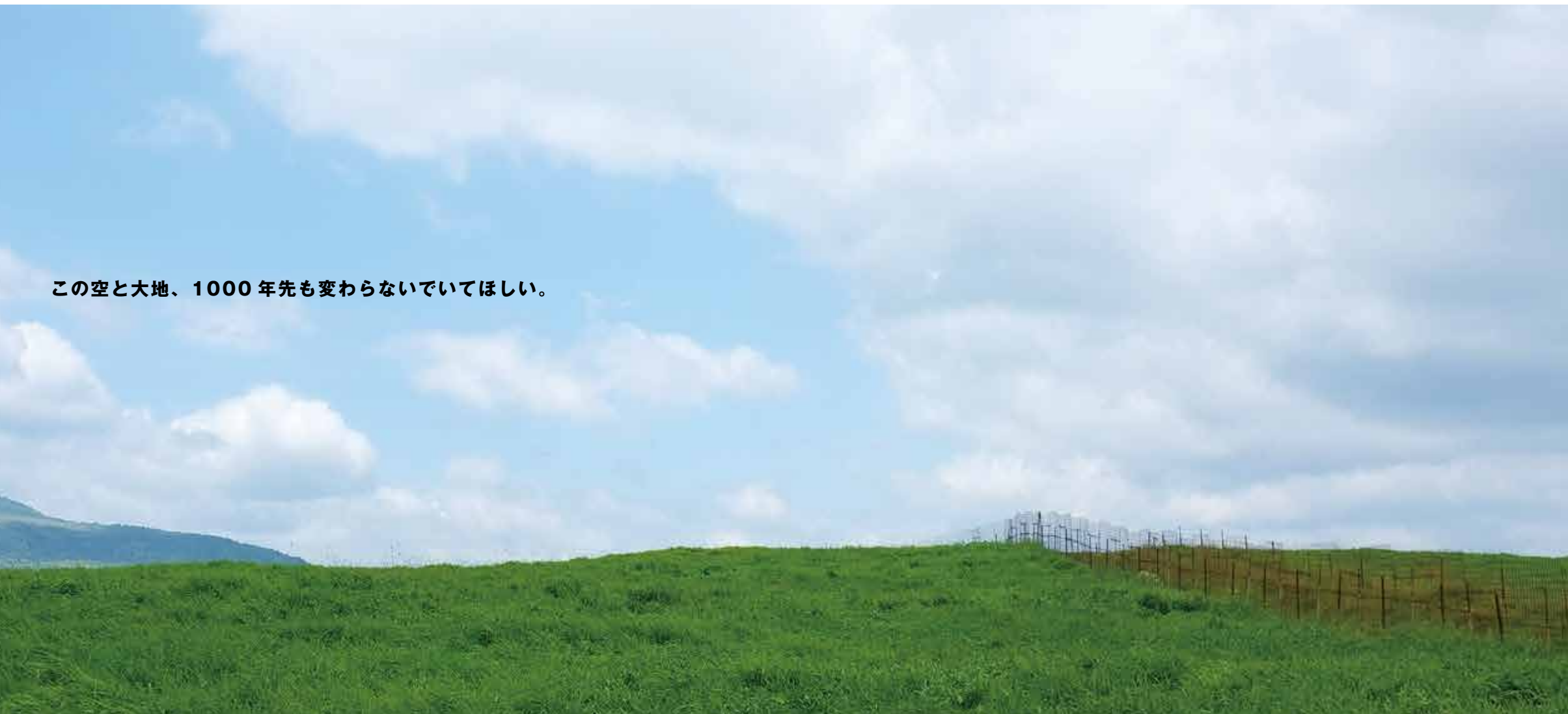


のんびり生きるって、いいねえ。

北軽井沢の別荘民にとっては、
遠足やハイキングの場所として親しまれてきました。
詩人・谷川俊太郎や岸田衿子の作品や日記にもしばしば登場。



この空と大地、1000年先も変わらないでいてほしい。



心を揺り動かす雄大な景色が、私たちが暮らすすぐ近くにあった。



きたかる別冊『浅間牧場はすばらしい。』発刊、一部始終。

そこには、初めて見る浅間山があった。

「この春に入牧する牛たちがやってきます。よかったら牧場内を見に来ませんか？」

「浅間家畜育成牧場」から「きたかる」編集部に連絡があったのは、5月のある日のこと。牧場事務所を訪ねると、真っ黒に日焼けした場長の松村さん、おっとり可愛らしい若き女性獣医師・桑原さんほか、職員の皆さんが出迎えてくれた。職員専用車に乗り換え、敷地内を奥へ。ハイキングコースにもなっている天丸山の先は、育成牧場の専有地。伝染病予防のため、放牧地や採草地への立ち入りは禁止されているが、この日は特別に許可をもらっての見学となる。

ゲートを抜けると、一本道はさらに奥へと続いていく。やがて車窓から見えるのは、なだらかな丘一面の緑の絨毯だけになる。見渡す限り、右も左もどこまでも、地平線まで続く大草原。ところどころ自生の森がぽつぽつと残り、数十頭ずつ群れをなす牛たちが、木陰でのんびり草を食んでいる。「あ、牛。あ、あそこにも！」子どものように牛の姿を探すことに夢中になっていると、運転席の松村さんに正面を見るよう促される。視線を向けると、そこにあったのは息を呑むほど大きな山の姿。浅間山だ。山麓に暮らしていれば当然見慣れているはずの山。ところが目の前に現れた山は、まるで初めて見るような姿をしていた。地平線すれすれまで、ゆったりと裾を広げた優美なシルエット。いつも東端に小さくおまけのようにくっついて見える小浅間山も、火山ドームらしい円錐状をして、堂々と足もとに控えている。何よりも、ここから見る浅間山は、圧倒されるほどに大きく、気高い。牧場全体を、北軽井沢の大地一帯を、さらにいえば丸い地球の表面を、その腕に抱きかかえるかのように、悠然とそこに存在していた。あまりにもスケールが広大すぎて、一瞬、自分たちがどこにいるのかわからなくなる。いつも暮らす町から目と鼻の先に、こんな世界が広がっていたなんて！

浅間牧場といえば、言わずとしれた北軽井沢を代表する観光スポット。ガイドブックにももれなく載っており、夏場はふもとの売店やレストランはたくさん観光客で賑わう。だが、そこはあくまでほんの入り口。地元になく暮らす人でも、この“ホンモノ”の牧場の姿を知っている人は少ないだろう。これだけのロケーションを、600頭の牛と数十名の牧場職員だけで独り占めしているとは、なんてズルい、いや、もったいない！　くまあ、カクカクシカジカ難しい事情がアリマシテ…>という反論を想定しながら、わざと意地悪く松村さんにそうぶつけてみると、意外な言葉が返って来た。「そうでしょう？　僕たちももったいなあとと思っているんです。地元の人や北軽を訪れる人にも、もっとこの場所のことを知ってもらえたらいいのにつて」。

いつまでも「閉じて」いるのは、もったいない。

そもそも浅間牧場の始まりは、今からおよそ130年前。明治16年、北白川宮能久親王直営の軍馬の育成牧場として、開墾・整備される。この最初の浅間牧場の敷地は、東西20km、南北18kmにわたり、今の北軽井沢や応桑地区がすっぽり含まれてしまうほどのさらに広大なものだったという。いったん民間の手に渡ったのち、昭和23年に群馬県に移管、27年から「浅間家畜育成牧場」と名前をあらため、戦後の酪農振興にともない、放牧の中心は馬から乳牛へ。六里ヶ原と呼ばれた、浅間山の噴火による焼け野原だった浅間北麓一帯は、浅間牧場を中心に、のどかで美しい高原の町へと生まれ変わっていく。

およそ800ヘクタールという広大な敷地と、本州では珍しい夏の冷涼な気候をいかして、県内の酪農家から乳牛を預

かり、放牧・育成。特に近年は、人工授精の技術向上を進め、酪農家の後継牛の確保にも貢献している。前述のとおり、運営の主たる目的が「受託牛の育成」であることから、観光地として一般に開放される敷地はごく一部（800ヘクタールのうち18ヘクタールほど）。観光牧場のように動物との触れ合いを期待して訪れる観光客から、よく「牛がいなかった」と不満の声が聞かれるが、それもそのはず。（こうして奥まで足を踏み入れ、全貌を知てみると、さもあらなんと納得する。）また、酪農家に対する安全や衛生の責任上、牛と人との間に一定の距離を保たねばならなかったのも、当然のことである。

けれども、私たちが驚きを隠せなかったように、このロケーションをいつまでも「閉じて」おくことはあまりにももったいないという声が、この数年、松村さんをはじめとする浅間牧場側からも上がり始めた。私たちに声をかけてくれたのも、あらためて地元民から見た牧場の価値というものを知りたいという思いとともに、「外側」からも浅間牧場の変革を後押ししてもらいたいからだ、松村さんが明かしてくれた。

もしもこの場所がもう少し開放されるなら――。「今あるハイキングコースに加えて、場内を横断する新しい道を浅間山麓トレッキングルートとして整備すれば、群馬県一の、いや北海道に負けない本州一のスケールのコースになる！」「冬場は採草地をスノーシューのフィールドにしたら。」「そもそも馬の放牧地だったことを生かしてホーストレッキングが出来てもいいね！」「県内外の子どもたちを招いて、動物やありのままの自然と触れ合う機会を作ってみては…？」職員の方たちと少し話すだけでも、夢のようなプランが次々とあふれてくる。

100年後の未来に残したい宝物。

場内をぐりと巡ったあと、牛舎へと案内してもらおう。その日の午前中に到着したばかりの“新入生”の牛たちが、すでにいくつかの群れをつくっていた。「迎え入れてからの数日間は、職員にとっても気が抜けません。24時間態勢で牛たちに付添うので大変です」と話す桑原さん。言葉とは裏腹に、子牛たちを見つめては可愛くて仕方ないという様子。彼女をはじめ、牧場のスタッフはみんな素朴で温かい人ばかり。場所の持つエネルギーや大きさのためか、ほんの数時間滞在しただけで、編集部メンバーの顔つきだって、なんだか柔らかくなっている。

なんといっても浅間牧場のすばらしさは、100年以上にわたって、ありのままの大自然が残されてきたことにある。ここでいう「ありのまま」とは、野生のままに放置してきたという意味ではない。火山の恵みである豊かな大地を生かし、同時にときには火山の脅威に直面しながら、牧場に携わる「人の手」によって大切に守られ、維持されてきたからこそ、今日のこの風景がある。

自然とともに生きること。その優しさも厳しさも雄大さも美しさもぜんぶひっくるめて体感することのできる、浅間牧場というネイチャーフィールド。この場所は、地元・北軽井沢はもちろん、長野原町や群馬県全体で、100年後の未来に向けて引き継いでいくべき、大切な誇りであり財産であることは間違いない。

浅間牧場が変革へと動き始めた今、「きたかる」からもあらためて呼びかけてみたい。私たちの足もとに、こんなすばらしい宝物が眠っているんだよ、と。

いざゆけ、浅間牧場よ、遙か希望の丘を越えて！



きたかる

別冊特集号

きたかる別冊特集号 2016年9月発行

企画・編集・制作／きたかる編集部 発行／北軽井沢じねんびと 印刷／上毛新聞 TR サービス

※この冊子は長野原町の助成を受けて発行しています。※「きたかる」ホームページ <http://kitakaru.me>